

受容せざるを得ない命を生きる

新 井 純

奨励者紹介〔あらい・じゅん〕
日本キリスト教団世光教会牧師
世光保育園長

そこで、マリアは言った。
「わたしの魂は主をあがめ、
わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。
身分の低い、この主のはしめにも
目を留めてくださったからです。
今から後、いつの世の人も
わたしを幸いな者と言うでしょう、
力ある方が、
わたしに偉大なことをなさいましたから。
その御名は尊く、
その憐れみは代々に限りなく、
主を畏れる者に及びます。
主はその腕で力を振るい、
思い上がる者を打ち散らし、
権力ある者をその座から引き降ろし、
身分の低い者を高く上げ、
飢えた人を良い物で満し、
富める者を空腹のまま追い返されます。
その僕イスラエルを受け入れて、
憐れみをお忘れになりません、
わたしたちの先祖におっしゃったとおり、
アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」

マリアは、三か月ほどエリサベットのところに滞在してから、自分の家に帰った。

（ルカによる福音書 1章 46—56 節）

先月11月末、ひょんなことからドイツ、ベルギー、スペインを訪問するチャンスを得た。新型コロナウイルスで渡航が制限されていたため3年ぶりの海外だったが、それだけでなく、初めてのヨーロッパ、しかもドイツのクリスマスマーケットを訪問できるということで、とてもエキサイティングなひと時だった。

ドイツとベルギーを訪問した後、今回の旅の目的の一つとなった大切な働きのために、スペイン・バルセロナに飛んだ。バルセロナ在住の日本人クリスチャンの礼拝でお話をさせていただくためだった。

通常会場は信徒宅なのだが、この時は有名なサグラダ・ファミリアが準備された。地下聖堂という、普段ミサが行われている場所で、そのオルガニストの一人が私の幼馴染だったため、せっかく来てくれるならそこで礼拝しようと場所をセッティングしてくれたのだった。地下聖堂なんて聞いたから、集会室みたいなところかと勝手に想像していたら、全然違って、数百人が入る大聖堂。聖壇の横には設計者のアントニ・ガウディのお墓があるという場所だった。その時の動画は YouTube にアップしたので、ご興味のある方はご覧いただける。

礼拝前にはサグラダ・ファミリアを見学したのだが、ドイツの由緒正しい大聖堂とは違い、とても明るかった。それが印象的。そして、イエスの母となったマリアが強調されているように感じた。もちろん、受難や復活の彫刻もある。でも、それ以上に雰囲気明るさも相まって、誕生のイメージを膨らませるような大聖堂だった。

主イエスがこの世にくだされる時、神さまは一人の少女をその母として選び出された。マリアというその少女は、一説によるとその頃まだ 12 歳から 15 歳くらいであったという。歳はともかくとして、彼女の身に起きた出来事は、実は災難以外の何ものでもなかった。なぜなら、彼女は婚約中の身でありながら懐妊を告げられたのだ。でも、彼女自身はもちろん、婚約相手のヨセフにも身に覚えがなかった。ということは、どう考えてもマリアが姦通の罪を犯した結果としか考えられなかった。いわゆる不貞行為ということになるのだが、もしマリアが姦通の罪を犯したとみなされたら、彼女を待っているのは石打ちというむごたらしい刑罰であった。

天使のお告げに対し、マリアはこう応える、「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」。あまりにも理不尽なお告げに、その理由を尋ねようとしているのだろうか。それとも、自分は罪に定められるようなことはしていないという訴えなのだろうか。

しかし、マリアは天使のお告げに耳を傾け、その事実を受け入れていく。それが誰もが見習うべき純粋な信仰として、後にはそれ自体、そして彼女自身さえもが信仰の対象ともなっていく。

しかし、マリアは本当にこの出来事を、天使がいうように恵みの出来事として受け入れたのだろうか。仮に、受け入れることを表明したにせよ、喜びと感謝をもってこれを受け入れていたのだろうか。

旧約聖書にヨブ記という物語がある。東の国一番の富豪で、主の前に正しく、信仰深いヨブを突然災いが襲う。彼は全ての財産や愛する家族を次々に奪われ、ついには自分自身の健康も犯される。

初めのうちこそ、これも神の定められた出来事であると信仰的に受け入れていたヨブも、ついには「私は罪を犯していないのに、神はなぜこのような災いをこの身にもたらすのか。私は自分の正しさを天の法廷で証言できるから、神の法廷に立って御自身を証言して欲しい。そうすれば納得できる。」というふう

に、神さまに対して挑戦するかのごとく、激しい問いかけをしていくようになる。

ヨブは、神さまへの信仰と、一方で良い行いには恵みと祝福が、悪い行いには災いがくだされるという、自分が信じてきた事柄との間で大いに悩み苦しむ、その災いを心から受け入れることができないでいたわけだ。むしろ、その災いを受け入れるしかないことは、彼にもわかっていたのだ。ただ、この災難を、信仰をもって受け入れることができるか、それとも自身の中で拒否し、否定しつづければならないのか、

という大きな壁の前に立たされていたわけだ。

最終的にヨブは、この災いを受け入れる。正確に言うなら、受け入れざるを得なかった。なぜなら、今の身に起きている出来事は、まぎれもない事実であったからだ。否定しようにも、拒否しようにも、逃れることのできない事実であったからだ。それを認めざるを得なかったのだ。

そして、ヨブが受け入れた時、彼はようやく神さまの声を聞いた。しかし、それは決してヨブを慰めるものだったとは言えない。むしろ、神が神であるという宣言であり、ヨブは受容せざるを得ない人生を歩んでいるということを思い知らされるようなものであったのだ。

それでもなお、ヨブはその言葉の中に救いを見出す。神さまは決して私を放ってはおかれなかったということ、つまりは常に私のことを見つめつつ、私の全てをご存じていてくださり、その訴えさえも聞いていてくださったということに、ヨブは慰めを得たのだった。

受容せざるを得ない人生を歩んでいる、という言い方をすると、それはあまりにも酷な表現だと思われるかもしれない。しかし、それは私たちにはいかんともしがたい事実なのだ。

マリアの身に起きた、この世的には災難ともいべき出来事も、彼女にとっては拒否権のない、受容せざるを得ない出来事だった。だからなのか、彼女も、天使のお告げがあった時なのか、それとも親類のエリサベトのもとを訪ねた後だったのかは定かではないが、これを受容する。しかも、彼女はこれを喜びとして受け入れていく。

そこで、彼女は神さまを誉め称えて歌う。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたえます。身分の低い、この主のはしめにも目を留めてくださったからです」。

驚くべきことに、彼女にとってこの災難は、いつしか恵みの出来事に換えられていた。身分の低い身であったということは、虐げられ、差別されていたような身分であったことを示す。そんな自分を神さまはしっかり見つめていてくださった、それが彼女にとって何よりの恵みの知らせであったのだ。

神さまが自分のことをご存じていてくださる、そのことを知った時、災いとも思える出来事さえもが恵みに変えられたと告白できたことが驚かずにいられない。その結果、自分はさらに苦しい目に遭うことになるかもしれないのに、神さまが自分を目に留めていてくださったということだけで、彼女は災いとも思える出来事を喜びとして受け止め、神さまを賛美したのだ。まさに、神さまが私のことをご存知でいてくださったという、その一点において、マリアは全てを受け入れた。

だから私たちもこのような信仰を持とう、と安易に言うつもりはない。むしろ、私たちのスタート地点は、ヨブがそうであったように、「なぜ」と問わずにいられないところなのだ。

しかし、一人の少女を通して世にくだされた救い主イエス・キリストは、私たち人間の罪を贖ってくださったことを思い起こさねばならない。全く罪のない方であったにも関わらず、罪深き私たち人間の身代わりとなって十字架にあげられ、その身代わりの死によって私たちは罪を赦される結果となる。イエスにとって、それは決して自ら望んだ道ではない。でも、イエスは「御心ならば」と、その道を全うした。なぜなら、それは神さまが備えたもう道だったからだ。

家族や財産を失ったヨブを見捨てなかった神さまは、身分の低い虐げられていた少女を用いられる方だった。その少女を通して世に生まれ出た救い主は、弱きを覚えている人々の間にこそ立ち、惜しみなく愛を注がれたのだった。

受容せざるを得ない人生が、光り輝く恵みの人生に変えられていくことに私たちも気づかされる時が、いつか必ず来るのだろう。どんなに困難の中にあっても、神さまから離れなかった者は、希望の中に神さまの恵みを見出すことをヨブは教えてくれた。

今私たちは、この思い通りにならない世の歩みの中で、どこに神さまの恵みを見出すだろうか。自分の思い通りの信仰を良しとする者には決して見出すことのできない恵みを、へりくだって全てを委ねる信仰の決断を新たにすることで、しっかりと感じ取りたいと思う。

2022年 12 月 21 日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録